

粘土遊びの指導法に関する一考察

藤 原 逸 樹

A Study of How to Instruct Children in Playing With Clay

Itsuki FUJIWARA

Abstract

This study investigates how to instruct children in playing with clay according to the children's developmental stages and actual conditions through the observation at a nursery school, the analysis of the visual data, and the interviews with the staff members. In conclusion, the following findings were obtained. At the stage of solitary play, activities with a small amount of clay to enjoy the tactile sense are recommended. At the stage of parallel play, skill-requiring activities such as making snakes or dumplings with an increased amount of clay are preferable. Finally, at the organized supplementary play stage, activities in which children, sharing the same images, use a large space and play with a large amount of clay are suitable.

Key words: playing with clay, developmental stage, instruction method

I. は じ め に

粘土はフレーベルの恩物の一つであり、幼児教育の中で長い間扱われてきた教材である。粘土遊びは、子どもが最も好む遊びの一つであると考えられる。しかし、幼稚園や保育所において子どもの発達を見通した指導がなされているとは言い難いのではないだろうか。指導方法に関する先行研究はまだまだ少なく、実践的な研究の必要性を感じるころである。

本研究を進める上で有用な先行研究は神谷が、ある幼稚園において、3～5歳がほぼ同数混在する縦割クラスでの粘土遊びを5～8月（第1期）と9～11月（第2期）に分けて実践している¹⁾。それによると、幼児期の粘土造形では、初めに目的を設けない粘土遊び（発達に照らし合わせた技法の段階的取り組み）を十分にこなすことで楽しみながら基礎的な粘土の操作を身につけ、その上で生活経験と結びつけられる物語の世界など、個々のイメージを豊かにする題材を設定し表現していくという、二期に分けた活動方法が表現の広がりや発展に有効であったという。

竹井の研究では、富山県の採石場から出た不要な泥を幼稚園に持ち込んで、砂場とは違った粘性のある土環境をつくり、4～5歳児の遊びの広がりを観察している²⁾。それによると、粘性の

1) 神谷陸代, 「幼児の粘土造形 —基礎的な技法の習得及び題材(テーマ)についての実践と検証—」, 『美術教育学』, 美術科教育学会誌第30号, 2009, pp.175-189

2) 竹井史, 「子どもの造形的な遊びを活性化する土環境に関する考察」, 『美術教育学』, 美術科教育学会誌第33号, 2012, pp.263-274

ある大量の土を用いることにより、4～5歳児の遊びは、①感覚的な遊び、②造形活動による表現遊び、③造形物を活かしたごっこ遊びの三つに分類されたという。

II. 研究の目的

本研究の目的は、粘土遊びの教育的意義と幼児教育で扱われる粘土について再検討し、広島市立A保育所の粘土遊びの実践を基に考察して、子どもの発達や実態に合った粘土遊びの指導方法について明らかにしていくものである。

III. 研究の方法と具体

本研究では、次の三つの方法により、研究の目的到達を目指した。研究の方法の一つ目は、粘土遊びの教育的意義の検討である。二つ目は、幼児教育で扱われる粘土について検討していくものである。そして三つ目は、保育実践の考察である。A保育所の粘土遊びの保育に参与し、保育実践を参観し、収録ビデオの分析をすることによって、指導方法を考察していくものである。

1. 粘土遊びの教育的意義の検討

粘土遊びの教育的意義について再検討してみたい。まず一つ目は、身体的機能や感性を高めるという視点である。白沢は、彫塑の教育的意義として「手の働き」の重要性をあげて説明している³⁾。触る、握る、つまむ、引っ搔く、丸めるといった行為は、手や指の発達を促すものである。土を触るという行為、いわゆる感触遊びは触覚の感性を大いに高める。冷たさや湿り具合、柔らかい、硬い、すべすべ、べたべたなどの手触り、重さといった刺激を敏感に感じ取ることができる。そして、様々な刺激（情報）を受け取った脳は活発に活動して、子どものより意欲的な活動を導くことになる。

二つ目は、創造性を育むという視点である。柔らかで、扱いやすく、様々な形になる可塑性は、形からの見立てを楽しむことができる。また、頭の中で描いたイメージが直ぐに具体的な形に表現できる。そして、何度でもつくり直しができるという点も重要である。

三つ目は、科学性を育むという視点である。子どもたちは、たたいたり引っ搔いたり延ばしたり丸めたりする行為によって起こる結果を確かめながら次の行為へ発展させている。また、ヘラや型抜きをどう使えばどうなる、どのように積み上げれば強度が増すかなどを考える姿は科学者の卵といえるだろう。

四つ目は、情緒を安定させる、そして社会性を育むという視点である。粘土という素材の持つ独特の手触りと、思いのままに形を変えることのできる特性は情緒的な安心感を与えてくれる。また、複数、あるいは集団での共同による造形活動は集団での関わりを通して社会性を育む契機となる。

3) 白沢菊夫、「彫塑の教育的意義」、『造形教育事典』、建帛社、2006、p.327

2. 幼児教育で扱われる粘土の検討

幼児教育で扱う粘土は様々な種類がある。感触遊びで扱われるスライムなども含めるならば、さらに多くの素材を取り上げて論じる必要がある。

<小麦粉粘土>

幼児教育でよく扱われるものとしてまず取り上げるのは小麦粉粘土である。それは、アナフィラキシーショックなどの小麦粉アレルギーというリスクを除けば安全性が高いという特徴を持っているからである。入手しやすく安価であり、柔らかさや手触りのよさ、水に溶けるもので色を練り込むことが容易といった特徴をあげることができる。小麦粉に水と少量の食塩、サラダ油を入れてこねるとできる。腐りやすいので、オーブンなどでクッキーのように焼成すると作品として保存ができる。

<パン粉粘土>

小麦粉粘土同様、安全性が高く入手しやすい。パン粉に水と少量の食塩、サラダ油を入れてこねるとできる。少しごわつとした独特の手触りを楽しむことができる。食用色素など水に溶けるもので色を練り込むこともできる。

<紙粘土>

紙粘土は、紙を細かく裁断して糊などを加えて手づくりすることができる。また、あらゆる種類のものが市販されている。乾くだけで素焼きした埴輪のような仕上がりになるもの、ブロンズのような仕上がりになるもの、薄く延ばして折り紙ができるようなもの、マシュマロのように軽いものなど枚挙に暇がない。着色も水彩絵の具などで容易にできる。紙粘土は、幼児教育のみならず、小学校の図画工作科、中学校の美術科、大人の趣味の造形活動などにも使われている。

<米粉粘土>

小麦粉アレルギーを回避するため、それに代わる米粉を粘土として使う実践が見られるようになってきた。市販されている米粉は白玉粉、団子粉、上新粉などである。白玉粉は柔らかさと弾力がある。団子粉や上新粉は、餅やうどんを想像すれば分かるようにコシの強い粘土ができる。いずれも水分量を調節して、子どもの力に合った硬さにして遊ぶとよい。

<油粘土>

油粘土は、水分を調節する必要がなく、乾かない、固まらないので管理が楽である。その意味では、指導者にとって都合のよい粘土である。いつでもすぐに出して遊ぶことができるので、戸外で遊べない雨の日に油粘土を出していつまでも遊んでいる子どもの姿を見ることがある。パスを削って練り込み着色することができる。スタンプ台などを使ってスタンプ遊びをすることができる。ホットケーキ状にしたものに型を押し付けた後、ローラーでインクをつけて版に写すこともできる。

<土粘土>

粘土は、本来「土」であるが、他の粘土と区別するために土粘土ということがある。油粘土は乾燥しない、固まらないのでいつでも直ぐに使うことができる。一方、土粘土は、乾燥すれば石のように硬くなるので湿布をしてビニル袋に小分けしておくなど、乾燥しないように管理しなければならない。しばらくぶりに使うときは指導者が前日に練っておくことが必要である。指導に熱心な者が転動すると倉庫に入ったまま石のように眠ってしまうことになりかねない。重量があり、持ち運ぶのも容易ではない。保管場所が必要である。このような理由から指導者に敬遠されがちな教材である。しかし、量感や心象性を表現できる粘土であり、水分量によって変化する

素材性や手触りは子どもに何度も体験させたい教材である。

<砂粘土>

砂粘土は、砂とPVA (polyvinyl alcohol), いわゆる洗濯のりを混ぜ合わせることによって、砂の粒子が粘着し、粘土のようにになる。砂の粒子のざらざらとした手触りが心地よい。PVAが乾燥すると固まるので作品として一定期間保存することが可能である。

<糠(粘土)>

糠は乾燥した状態のものが市販されている。糠は水分が少ないとパスついて粘着性が出ないが水を加えていくと可塑性が出て、粘土のようにになる。少しごわごわした独特の手触りを楽しむことができる。葉の上において食べ物に見立てるなど、ままごと遊びにも適している。

<感触遊びに用いる素材>

片栗粉は、水を加えて独特の手触りを楽しむことができる素材である。ギュッと握れば一旦固まったように見えるが、掌を開くと溶け出すダイラタンシーという性質を持っている。その感触を他に例を見ない。

寒天は、片栗粉同様、感触遊びでよく用いられる素材である。誤って口に入れても安全である。食用色素などで着色することができる。

スライムは硼砂とPVAと水を混ぜ合わせて手づくりすることができ、独特の手触りを楽しむことのできる素材である。しかし、硼砂には毒性があり取扱いには注意が必要である。水に溶けるもので着色することができる。蛍光絵の具で着色すれば、ブラックライトで光るスライムとなる。

3. 保育実践の考察

広島市立A保育所は、2011～2012年度の2年間、粘土を用いた保育に取り組んだ(表1)。A保育所の子どもたちの中には、「落ち着きがない」「衝動的」「あきっぽい」「相手の話が聞けない」など気になる実態の子どもがいた。また、「自己肯定感」の弱さも感じていたそうである。描画活動に集中して取り組めない子どもも数名いたという。このような子どもたちにどのような活動体験が必要かと考えた結果、子どもの働きかけに応じて形が自由自在に変化する粘土の「可塑性」あるいは「応答性」に着目した。自分の働きかけがすぐさま形として現れる粘土は、子ど

表1 粘土の保育実践

2011年	6月	実技研修	「粘土技法」(筆者担当)
	7月	保育実践	「初めての土粘土」
	7月	保育実践	「たたく ちぎる まるめる のぼす型をつける」(筆者担当)
	10月	保育実践	「広い場所で作る」
	10月	保育実践	「山をつくる トンネルをつくる」(筆者担当)
2012年	1月	保育実践	「積む 並べる 足で踏む つなげる一緒につくる」
	1月	保育実践	「補助材を使ってつくる」
	2月	保育実践	「親子でお弁当をつくる」
	7月	理論研修	「粘土の造形活動について」(筆者担当)
	9月	公開保育	「たたく ちぎる まるめる のぼす 並べる つなぐ」(筆者担当)
2013年	10月	公開保育	「たんぼぼどうぶつえん」
	2月	保育実践	「粘土板をつなげて」
	3月	保育実践	「みんなで作ろう」

もの好奇心を刺激してやまない。そして働きかけに応じて自在に変化する形から子どもは自由にイメージを広げていくことができる。また、うまくいかなかった時には何度でも作り直すことが可能である。粘土は、素手で触りながら表現でき、描画よりも、より根源的な表現ができる素材である。このような魅力を持った粘土を、4歳児クラスを中心にして2年間実践していった。

筆者は、A保育所の粘土遊びに関する研修と保育計画、そして保育実践に参与した。また、指導者として粘土遊びの保育を2回担当した。

本研究は、A保育所の具体的な保育実践を参観し、取材すること、さらに収録ビデオの分析することを通して、粘土遊びの指導方法について考察していった。



図1 へらや型抜きなどの用具



図2 2011年7月の保育実践

2011年7月の保育実践(図2)は、「たたく、ちぎる、まるめる、のぼす、型をつける」活動を筆者が担当した。初めは手指をしっかり使った活動をしていた。活動の多様性を期待して数種類のへらやクッキーの型抜き、空き容器などの用具を提示すると、子どもたちは、それらの用具を使って切ったり、型抜きをしたり、押しつけて跡をつけたりする活動に終始した。へらや型抜きなどの用具の扱いに気を取られてしまい、量感のある造形を楽しむことができなかつたようである。初期の段階では、自分の手指でしっかり触り、手指で形づくる活動が大切である。

この反省点を生かし、2011年10月の実践「山をつくる トンネルをつくる」(筆者担当)では、へらや型抜きなどの用具の使用は避けた。子どもたちは、手指をしっかり使い、粘土と格闘するようなダイナミックな活動となった(図3)。



図3 2011年10月の保育実践(筆者担当)



図4 2012年1月の保育実践

2012年1月の実践(図4)「補助材を使ってつくる」では、割り箸や板材などの補助材を準備した。子どもたちは、広い場所で多量の粘土を使用する活動にも慣れ、量感のある造形を楽しむことができていた。しかし、割り箸や板材を効果的に使用することは難しかったようである。

いくつかの保育実践の中でも「たんぼぼどうぶつえん」(公開保育)は、質の高いものであった。その概要は、次の保育指導案で示すことができる。本題材の選定から保育指導案の立案、保育後の省察までを筆者が共同で行った。

<保育指導案>

指導者 広島市立A保育所 B保育士 C保育士

- 1) 日時・場所 2012年10月24日(水) 10:00~11:00 D保育室
- 2) 学年・学級 4歳児 Dクラス(男児20名 女児13名 計33名)
- 3) 題材名 たんぼぼどうぶつえん ~経験したことから土粘土であそぶ~
- 4) 子どもの姿

環境に慣れるまで時間がかかったり、自分の思いを言葉で表すことが難しかったり、個別に配慮がいる子が多い。人数が多く、集団が大きいので、話を聞くまでに時間がかかり、集中してじっくり遊ばず、トラブルも多かったが、泥団子づくりは大好きで、何度も失敗を繰り返しながら日々楽しんできた。夏には、絵の具や粉を使った感触あそびを全身でダイナミックに楽しみ、心地よさや開放感を味わい、少しずつ安心して自分の思いを表現できるようになっている。土粘土は子どもたちの大好きな素材の一つで、初めのうちは、踏んだり、頭から落としたり、触れたときの心地よさを感じながら遊んだ。最初は、力が弱く「できん」と言って形をつくることをあきらめる子も多かったが、回数を重ねるうちに、徐々にイメージしたものを形にして遊ぶ姿が見られるようになっていく。また、自分のつくったものを友だちに見せて「こんなのできたよ」とかわりが生まれ、少しずつ「一緒につくろう」と協力する姿もでてきているところである。ただ、個人差が大きく、イメージがわきにくい子や形にならない子もいる。

5) 題材設定の理由と指導の流れ

遠足で動物園に行き、いろいろな動物をじっくり見て回った。帰ってから、動物の図鑑を見たり、絵本を読んだり、絵をかいたりして興味・関心が深まっている。イメージがわきにくい子が多いので、楽しかった実体験を思い出し、自由につくってあげたいと思い、この活動を取り入れた。その子なりに自分の思いのままに表現したり、友だちと一緒につくったりする楽しさを感じてほしい。

第1次 動物園に遠足に出かけ、いろいろな動物を見る。

第2次 動物に関する図鑑や絵本を見て、興味関心を深める。

第3次 楽しかった遠足の経験を思い出し、スポンジペンで絵をかく。

第4次 土粘土の感触を楽しみながら、自由につくって遊ぶ。(本時)

本時の流れ

ねらい	土粘土の感触を楽しみながら、自分なりに自由に表現して遊ぶ。		
時間	子どもの活動	保育者の援助	環境構成
10:00	<ul style="list-style-type: none"> 話を聞く。 身支度をする。 土粘土を取りに行く。 話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> これからする活動の準備について、分かりやすく話す。 汚れてもいい服装をして思いきり遊べるようにする。 動物園のマップを見ながらいろいろな動物の話をする。 遠足に行ったことを思い出しながら、活動に興味を持ち、「やってみたい」と思えるように話をしていく。 子どもたちの言葉や反応を受け止めていく。 土粘土の感触を楽しみながらつくっていきけるようにする。 なかなか活動に入れない子には、声をかけ一緒に遊びながら、無理なく活動に入れるようにする。 子どもたち一人ひとりの自由な発想や工夫を認め、共感する。 粘土を存分に使えるように用意しておく。 	(準備物) 土粘土 ブルーシート バケツ たらい トレイ
10:50	<ul style="list-style-type: none"> それぞれがイメージしたものを自由につくる。 友だちと一緒に協力してつくる子もいる。 土粘土が足りないときは、取りに行く。 できたものを友だちや保育者と見合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のつくったものや、友だちのつくったものを見ながら、お互いの表現を認め合えるようにする。 	かまぼこ板 雑巾
11:00	<ul style="list-style-type: none"> 片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> みんなで協力して片付けができるようにする。 	足拭きマット



図5 2012年10月の保育実践



図6 2013年2月の保育実践

2012年10月の保育実践(図5)「たんぱぼどうぶつえん」は公開保育であった。終始一人で遊んだ子もいれば、近くの子に声をかけたりはするが遊びそのものには入らない子もいた。複数の子どもが同じ場所において、同じ遊びをしながらも、相互に関わりを持たない平行遊びの状況も見

られた。さらには、数人が次第に集まり、一つの目的を持ってつくる共同遊びの状況も見られた。みんなで動物園に行った経験を基に土粘土で遊んだ本時は、様々な実態の子どもが混在する4歳児Dクラスに合った活動であった。それぞれが土粘土の感触を楽しみながら、自由につくって遊ぶことを保障できる保育であった。

2013年2月の保育実践(図6)は、ひも状、団子状の粘土を粘土板(画板を代用)に貼り付けて線で描くような遊びになっていた。初めは近くの子の遊びを見てはいるが独立した遊びをしていた。遊んでいるうちに子どもたちは自然に近くの子と粘土板をくっつけることを思いつき、線がつながり、道が延びて相互にかかわりを持ちながら、お話が展開していく活動となった。これは、平行遊びから、他の子と遊ぶが、基本的には自分のやりたいことが保障される連合遊びへと移行したと言えよう。

IV. ま と め

幼児の遊びは発達に伴って、一人遊び→平行遊び→連合遊び→共同遊びへと変容していく。このような各段階においてどのような粘土遊びが望ましいかを示したものが表2である。

表2 粘土遊びの指導方法

一人遊びの段階	感触遊び	小 ↑	・寒天, 片栗粉, スライムなどの素材を触る ・少量, 柔らかめの粘土を使用
平行遊びの段階	技法遊び	イメージの共有	・手指をしっかり使う
連合遊びの段階	自由製作		・ねらいに応じてへらなどの用具, 割り箸や板などの補助材を使用
共同遊びの段階	目的製作	↓ 大	・ねらいに応じて広い場所で多量の粘土を使用

一人遊びの段階では、寒天、片栗粉、スライムなどの素材で感触遊びを楽しむ活動があげられる。また、机上の粘土板で少量の柔らかめの粘土を使って感触遊びを楽しむ活動が考えられる。小麦粉粘土やパン粉粘土は、この活動に適している。

手指の力がついた平行遊びの段階では、粘土の量を徐々に増やしへびや団子などをつくる技法遊びが考えられる。油粘土や土粘土は、この活動に適している。初期の段階では、へらなどの用具は使わず手指をしっかり使ってつくることが肝要であり、割り箸や板などの補助材も学年が進み、その活動のねらいに応じて使用すべきである。

4歳児クラスでは、それぞれの粘土板を使って技法遊びをし、近くの子と粘土板をつないでお話が展開していく活動が提案できる。

共同遊びの段階では、共有できるイメージを持ちながら広い場所で多量の土粘土を使ってつくる活動が考えられる。4歳児・5歳児クラスでは、共有のイメージを持ちながら自由につくる段階から、山やトンネルなどの目的を設けてつくる段階へ発展させていくことが提案できる。

[2015. 6. 25 受理]